

鶴見川は、全長 42.5 キロの一級河川である、昔から洪水を繰り返している。

鶴見川流域は昔は海であり海面が下がり本流とその支流である大熊川、鳥山川、早淵川、矢上川などによって形成されている。その本流である鶴見川は、川の勾配が緩いために水の流れが遅く、その上に大きく曲っており、そのうえ川幅が狭いため、大雨が降ると洪水になりやすい。

鶴見川の勾配が緩いために河口から海水が昇りやすく、満潮時には新羽橋の近くまで逆流している。

現在は、洪水治水対策として多目的遊水地が運用を開始し、川の水量を調整している。

現在は流域面積の85%が市街地化された典型的な都市河川となり、流域人口はおよそ200万人を数えている。



分水路計画

海へ分水路を造って被害を減らそうとしたが分水路の通る予定地に住んでいる人々の大反対にあい幻の分水路計画となってしまった。

縄文時代、現在の新横浜地区まで海の入江だった。

現在の海拔30～40メートル位の高台には多くの貝塚が残っている。

明治 43 年の大洪水を契機として、両岸の堤防を改修し、完成記念として大正堤の桜並木を作り、桜の名所となった。

この時堤防工事で、家に移転しなければならなくなった加藤さんが新しく井戸を掘ったところ、飲用に出来ない茶色の水が涌いた。

調べた所ラジウム温泉で有る事が分かった。

これが綱島温泉の始まり。

大正 15 年 2 月 東京横浜電鉄神奈川線が開通し、綱島温泉駅が開業する。

駅前には温泉街が形成され、温泉街・芸者街(花街)として、観光目的や湯治目的、接待目的として利用が多くなり、東京の奥座敷などとも呼ばれ、たいへん賑わっていた。

東海道新幹線が開業し交通の発達と共に箱根や伊豆が首都圏の保養地になったため、旅館の数が減少。

以降は都心へのアクセスの良さなどからマンションデベロッパーなどが中心に温泉旅館の用地買収を行いマンション建築が進んだ。

最後に2015年2月25日鶴見区民センター サルビアホールにて開催されるインターシティ・ミーティングに於いて『歴史に学ぶ』と題し講演を行います。

横浜日吉ロータリークラブ会員の皆様にかかれましては全員ご出席宜しくお願い致します。